

## P-126

## 嘔吐への不安をもつ子どもとその親や関係者に対する認知行動療法の有効性 –ASD傾向を持つ8歳男児の症例報告–

古瀬 弘訓<sup>1)</sup>、中村 裕子<sup>2)</sup>、前垣 義弘<sup>1,2)</sup>

<sup>1)</sup>鳥取大学医学部附属病院 脳とこころの医療センター、

<sup>2)</sup>鳥取大学医学部 脳神経医学講座 脳神経小児科学分野

不安症状は自閉スペクトラム症（ASD）において定型発達よりも多くみられることが報告されている。不安症状に対しては認知行動療法の有効性が示されており、発達障害の特性に応じたプログラムや親への介入の重要性が示唆されている。今回、嘔吐不安の男児例に対して社会参加を目指した認知行動療法を施行した。【症例】症例は8歳の男児。3年生の給食時にのどにものが引っ掛かり嘔吐。その後、給食の度に嘔気を感じたり、頭痛を生じたりしていた。器質性疾患は否定的で、ASD傾向が認められた。吐いてしまうのではという不安から常にビニール袋を持ち歩き、本児が捨てるのを拒むため母はビニール袋を車にため込んでいた。また、嘔吐に対する不安から外出を避け、学校や初めての場所には参加ができない状況にあった。本児が苦しむため、母は学校に行かせたくないと思うなど不安症状の維持に母親の関わり方が影響していると考えられた。また本児が通所していた施設職員も本児の不安な様子にどのようにかかわればいいのかわからない状況であった。本症例では、嘔吐に対する不安のコントロールを目的として本児と親も含めた認知行動療法を全10回行った。認知行動療法の内容は、1) 心理教育、2) 段階的エクスポージャー、3) 行動実験を行った。また、親や施設職員に対して嘔吐不安が維持している理由やその対応について心理教育を行った。認知行動療法では、まず本児や母に対して不安のメカニズムや本児の行動や母のかかわりがどのように不安を強化しているのかを説明した。吐くという言葉に対して強い恐怖があったため、本児が嘔吐不安を生起する「吐く」という文字から絵などへと段階的に暴露していった。そして吐いてしまうのではないかという心配に対しては、心配することは起きないことを確認するためにビニール袋を持ち歩くことをやめる行動実験を行った。母親や施設職員に対しては、嘔吐に対する不安がみられても吐くことはないこと、積極的に社会場面へ関することを促す関わりをすることを提案した。認知行動療法の結果、嘔吐に対する不安は消失し、現在学外の支援施設に通所できるようになった。親や周囲の大人が子どもの不安症状に影響を与えていた場合において、子どもに対しての介入だけでなく、親や周囲の関係者に併せて介入することがASDの児童に対して有効である可能性が考えられた。

## P-127

## 療育空間における空気感と繋がりの創造 – 幼児への音楽療育におけるアプローチの意義 –

立本千寿子<sup>1)</sup>、池崎 智也<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>兵庫大学、<sup>2)</sup>児童発達支援センター 明石市立あおぞら園

【問題と目的】音楽療法（療育）は、「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに貢献する<日本音楽療法学会>」と定義されている。音楽療法（療育）は、児童発達支援・放課後等デイサービスや特別支援学校・医療現場等において実践され、その有効性や実践性の高さが証明されている。特に、幼児の音楽療法（療育）では、特別支援のアプローチとしての方法論として機能している面が高い。そこで本研究では、音楽療育を発達上の課題を有する幼児に実践した上で、実際のセッション案を分析し、音楽療育におけるアプローチ意義について検討することを目的とする。【対象と方法】研究参加児は、本センターに通園するASD（自閉スペクトラム症）児、MR（知的障がい）児、未診断等の幼児であった。本研究では、通園型発達支援センターで全24回の音楽療育の実践を行った。音楽療育の形態は、3歳児クラス・4歳児クラス・5歳児クラスのクラスにおいて、約10分ずつのセッション案を考案し実践した。そして、全セッション内容を要素ごとに分類し、実践者相互でのディスカッションを通して、音楽療育において特に意義があつたと判断されたアプローチを抽出した。【結果】1. 空気が変わる瞬間の創造（受動的）ギターの音や振動、民族楽器の素朴かつ珍しい音・リズムの聴取により、幼児の目が前に向き、療育中の保育空間が静かになり、空気が変わる瞬間がある傾向にあり、音空間に共に身を置き、心が外界にひらく、共に音を感じるという機序がみられた。2. 媒体を介した繋がりの提供（能動的）音高の異なるハンドベルを1つずつ持ち順番を待って自分の番が来たら音を奏でる活動等によって所属感を感じる等、楽器を媒体として外界や他者と繋がる機序がみられた。【考察】ASD等の幼児にとって、外界からの刺激によって外に“ひらく”瞬間をもつことが療育における1つの重要な要素である。また、同じ空間に周りと同質の状態で“共に在る”ことは、他者と共に生きていく基盤を養うことになる。また、他者と繋がることが苦手な発達障がいの幼児にとって、楽器等の媒体があることは、ダイレクトではない安心感があるだけではなく、自分の存在を感じ確かめられる有益なツールとなる。そこには、幼児→媒体→療育者、幼児→媒体→幼児等、数通りの非言語による繋がりが創造される。